



ESSAY

～霊園に仙台ゆかりの
人をたずねて6～

門馬 兼二 (1924～2010)

砂ぼこりが舞い上がる青葉通に店を構え、
市民の食を支え続けた。



西大立目 祥子

“青葉通の鶏肉屋さん”と聞けば、多くの仙台市民が、その店構えをすぐに思い浮かべることだろう。青葉通と東四番丁の交差点近くに立つ「門馬商店」である。青葉通に面した店の間口はわずか2間だけれど、鶏肉を中心に合鴨やキジなどの特殊肉までを扱う専門店だ。この店を20代で興したのが門馬兼二さんである。

娘婿の門馬佳三さんが、店の歴史をひもといてくださる。「実家は亘理で鶏肉や卵を商っていたんです。戦後、その支店として仙台に出店したんですね。相馬か仙台か迷ったらしいんですが、仙台に嫁いでいた姉を頼りに出てきたのは、昭和25年12月のことです」。昭和25年といえば、仙台空襲からまだ5年目。青葉通にはケヤキも植えられておらず、風が吹くたび砂ぼこりが舞い上がって“仙台砂漠”といわれていた頃だ。しかし、そんな風景も、志抱く26歳の若者には、新しい時代を象徴する、胸を高鳴らせるものに映ったのかもしれない。

持ち前の負けん気で、がむしゃらに働いたのだろう。社会が安定し市民の暮らしが落ち着いたことに加えて、進駐軍からの注文も商売を押し上げた。いち早く三輪のトラックを導入し、わずか10年後の昭和36年には法人化を果たして、現在の店舗を建設する。写真はその頃のものだ。



現在のビルを建築した昭和36年頃の店。配達に使っていたのは運搬車。電話の局番は、まだ1桁だった。墓碑は7区。



「商売の才覚を持っていたんでしょうね」と話す佳三さんの義父への眼差しは尊敬に満ちている。「努力家で、誠実で、人に対して生真面目」と評する理由は、教えてくださるエピソードからも伝わってきた。たとえば、仕入れは長く同じところとつきあい、養鶏場は小さなところを大切に。住み込みの従業員に示しがないから、と宴会は早めに切り上げ、夜10時までには必ず帰宅した。若い人の意見は言い返すことなく聞いて、いいアドバイスをくれた…。お話をうかがっていると、商売で信頼を得るには何が大切かを教えられるようだ。やがて、人望を集めた兼二さんは、日本食鳥協会理事や五城ライオンズクラブ会長などの要職を務めるようになっていった。

長女の栄子さんと結婚し、佳三さんが後を継いだのは24歳のときだ。「義父はまだ50歳でバリバリ。何もわからないからやってこれたんでしょうね」と笑う佳三さんは、兼二さんが積み上げたものを2人で受け継いでいこうと、その後ろ姿を必死に追いつけた。15年前、佳三さんが、負債をかかえた居酒屋の経営を引き受けることに決めたとき、義父は何もいわずにうなづいた。一生懸命やり続けたことを認めてくれた。佳三さんはそう強く感じたという。

70歳を過ぎて、なお一心に砥石に向かった兼二さんも80歳になると、銀行に行くのに息切れするよ、とこぼすようになった。肺を病んでいた。享年85歳。信頼する一人の医師のもと治療を重ねた末のことだった。

暮らしも世相も激しく変わり続ける時代に、市民の食を支え続けた。かしわからチキンへ、呼び名まで変えていく商品に、そして、店の小窓の向こうで高さを増していくビル街とケヤキ並木に、何を読み取り何を感じていたのだろう。墓前で胸中をたずねてみたい気がする。

西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)
フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)。

